

徳島ゆかりの美術 （展示室1 パネル 1/7）

当館は2025年3月末現在、約1万点のコレクションを有しています。その中から「徳島のたからもの」と題して、日本の洋画草創期に活動した原鵬雲^{はらほううん}や守住勇魚^{もりずみ いさな}、西洋の伝統的な絵画理論と技法を学び、端正で古典的な裸婦像を描いた伊原宇三郎^{いはらうさぶろう}、戦後日本の前衛美術をリードした山下菊二^{やました きくじ}のほか、日本に水彩画を広めた三宅克己^{みやけ こつき}、大正期の個性派として活躍した広島晃甫^{ひろしまこう ほう}など、日本近代美術史に大きな足跡を残した徳島出身の作家たちの作品を中心に紹介します。

また「描かれた徳島」、「戦後80年 画家と戦争」のテーマにより、様々な視点からコレクションの魅力に迫ります。

＊会期中、展示替えを行います。

Art and Artists Associated with Tokushima

The Tokushima Modern Art Museum has about 10,000 artworks as of the end of March, 2025.

In this section, we set a theme of “Treasure of Tokushima”. You can see the works by the artists born in Tokushima and carved their names in the history of Japanese modern art : Ho^un Hara and Isana Morizumi who were active in western paintings in modern Japan from early period, Usaburo^ Ihara who learned Western traditional painting theories and techniques and drew classic nude women, Kikuji Yamashita who led the postwar Japanese avant-garde paintings, Kokki Miyake who spread the watercolor in Japan, and Koho Hiroshima who showed unique painting style.

In addition, we approach a charm of artworks from various viewpoints by a theme of “Drawn Tokushima” and “80 years since the end of Asia and Pacific war — Painters and war”.

＊ A part of this exhibition will be changed during the exhibition period.

描かれた徳島 （展示室1 パネル 2/7）

徳島には鳴門の渦潮、祖谷の蔓橋^{い や かずらばし}といった景勝地があり、阿波人形浄瑠璃、阿波踊りなど豊かな郷土芸能が息づいています。ここでは、そうした徳島の風景や風物が描かれた作品を展覧します。

県南部の阿南市出身の画家、久米福衛^{く め ふく え}と日下八光^{く さ か はっこう}の作品に着目してみましょう。美術教育者で、洋画家でもあった久米は故郷の漁村、椿泊^{つばきどまり}から海を望む光景を描きました。地平線に浮かぶ島々や海面に降り注ぐ明るい光は、戸外の自然光の下での制作を重視する外光派の表現に学んだものです。空や海を一色に塗り込めるのではなく筆跡を残しながら描いており、時間とともに変化する空模様や水面の揺らぎ、煌めき^{きら}を画面に留めようとする意識がうかがえます。

〈阿南の海〉（前期展示）は、日下が故郷の町に程近い北の脇海岸周辺の風景を描いた作品です。繊細な色遣いと細やかな筆致で、桃色の花や柑橘系の実をつけた植物が見える集落から松林の向こうの入江、さらにその先の山々を、上空から俯瞰した構図で表しています。細部を見てみると、干物を干す人物や帆を張った小船などが小さく描きこまれ、のどかな生活感が感じられます。農村で生まれ育った日下にとって、自然とともに暮らす人々の姿はごく身近なものでした。

県西部の三好市には、日本三大秘境の一つに数えられる祖谷溪^{つるぎさん}や剣山などがあります。同市出身の版画家、谷口董美^{たにぐちくみ}は祖谷の蔓橋、阿波踊りなど徳島の文化に取材した作品を数多く手がけました。その谷口の実弟に当たるのが、山下菊二です。故郷の辻町（現・三好市井川町辻）の家々のスケッチは、古くから水運の拠点、宿場町として栄え、現在も往時の面影を残す街並みの貴重な記録とも言えます。

県北部の鳴門市を代表する渦潮は、古くより様々な画家たちの画題となってきました。戦後の京都画壇を代表する日本画家の池田遙邨^{いけだようそん}は全国を行脚した旅の画家として知られますが、1949年、鳴門海峡付近の島々や潮流をとらえたスケッチを複数残しています。〈鳴門〉（後期展示）はそうした写生の成果の集大成とも言うべき作品で、轟々^{ごうごう}と渦巻く波濤^{はとう}の表現からは、今まさに实景を前にしているかのような画家の興奮と臨場感が伝わってくるようです。

なお大阪・関西万博特別連動企画「浮世絵の華－原安三郎コレクション－」（展示会期：9月6日－10月13日）では、歌川広重が徳島に取材した〈六十余洲名所図会 阿波 鳴門の風波〉を展示します。あわせて御覧ください。

※前期展示：9月6日－10月19日

後期展示：10月21日－11月30日

戦後 80 年—画家と戦争（展示室 1 パネル 3/7）

今年は、アジア太平洋戦争の終結から 80 年の節目に当たります。これを機に、徳島の画家たちが戦争とどのように向き合ったのか、その軌跡をたどります。

日本にシュルレアリスムを紹介し、1930 年代の前衛美術運動を率いた福沢一郎は、ファシズムの台頭により戦争へと傾斜する中、人道主義に立った創作活動を展開し、若手作家たちに大きな影響を与えました。1938 年、19 歳の時に福沢が主宰する絵画研究所に入所した山下菊二もその一人で、政治的、社会的な思想を作品に反映する考え方を吸収していきます。

しかし、翼賛体制の本格化とともに軍部による思想言論の統制、治安当局の監視がいっそう強化され、当時多くの前衛画家たちが参加していた美術文化協会の代表を務めていた福沢は、1941 年、治安維持法の嫌疑により逮捕されました。これにより、周辺の画家たちが自身の作品を事前に点検し、制作を控える動きが広がっていきます。

そのような時流にあって、シュルレアリスムの新進作家として注目を集めていた森堯之^{もりたかゆき}も新たな表現を模索していました。自身も結成に参加した美術グループ「表現」の第 8 回展に出品した〈フィンガー・ピクチャー〉の実験的な作風に対し、1941 年の応召を経て夫人の実家が^{ふんが}あった中国の都市、大連に滞在していた頃に描いた〈ロシア教会〉は、写実性を志向していることが明らかです。

このような前衛美術への弾圧が表現の萎縮を招く一方、日中戦争が勃発した 1937 年を境に軍部主導の下、戦争を遂行するためのプロパガンダの一環として戦争画の制作が奨励されるようになり、軍の委嘱を受けた従軍画家が急増します。当時、国家が主催する帝国美術院展の主要作家であった伊原宇三郎もまた陸軍省嘱託画家として戦地に赴き、中国戦線に取材した〈^{ふんが}汾河を護る（夜は不眠の警備）〉（第 2 回文部省美術展覧会出品作）を始め、数多くの戦争画を手がけました。

戦争によって画業を断たれた森、国策に沿う形で戦争画を描いた伊原、戦場での過酷な体験を率直に告白した山下一彼らの作品を通じて、戦争と美術について考える機会としていただけたら幸いです。

山下菊二と戦争① （展示室1 パネル 4/7）

戦争や差別の問題に鋭く切り込む作品を通じて、社会の暗部を世に問い続けた山下菊二。その画業の根本には、生涯の師と仰いだ福沢一郎の存在があります。福沢は制作の技術だけではなく、国内外の画集や画論などから知識を吸収し、それを研究生同士で議論しながら、人間や社会一般に対する各自の考えを構築させるという指導方針を掲げていました。山下は後年、その教えから「絵の中の思想—私は何者だという反問」（註1）を導き出したと語っています。

〈国引きのデッサン〉は、福沢が1943年5月の第4回美術文化協会展に出品した同名の作品の下絵です。隠岐や新羅^{しらぎ}を引っ張り縫い合わせると出雲国ができるという神話の一場面を描いたもので、画中の綱を引く人物のモデルを山下が務めました。制作の現場に立ち会った研究生の一人の「侵略戦争の諷刺では」という問いかけに、福沢は「日本的な絵なら描いてもいいというから、これを描いたのだ」と応じたといえます（註2）。ここには、神話に託^{かこつ}けて日本的なものと対峙^{たいじ}する福沢の姿勢が読み取れます。

戦後、福沢はイタリアの詩人ダンテの『神曲』に取材した作品のシリーズを展開していきます。これらは「日本の混乱時代の諷刺画として描いたもの」（註3）で、山下は福沢が1947年5月の第2回現代美術総合展に出品した〈憎悪沼〉の模写を残しています。折り重なる死体^{もだ}に悶え苦しむ人々の姿は、あるいは山下が戦場で実際に目撃した光景と重なって見えたのかもしれませんが。その迫真的な表現は、確かな強度を持って私たちに訴えかけてきます。

（註1）山下菊二「画家であることよりも」『アート・トップ』1976年2月、160頁。

（註2）加太こうじ「画塾・福沢研究所」『思想の科学』1989年2月、67頁。

（註3）「地獄絵について、福沢一郎氏に聞く（聞き手・本間正義）」『地獄絵・福沢一郎の世界』国立国際美術館、1978年、5頁。

山下菊二と戦争② （展示室1 パネル 5/7）

山下は1939年12月に召集を受け、中国戦線に送られました。そこで、捕虜や現地に暮らす人々に対する日本軍の筆舌に尽くしがたい暴力行為を目の当たりにしながら、決然と抗議することができなかった反省、悔恨について戦後、様々な機会をとらえて語っています。

前線で病を患い、台湾へと移された山下は、休暇の合間にスケッチ用のノートに忍ばせて慰安所に足を運び、娼婦や周囲の風景のデッサンを描きました。その中には、複数の画像を組み合わせるモンタージュの手法で、女性たちと叢に横たわる人体が描かれた作品も含まれます。本来、異質なものであるはずのイメージはここでは互いに干渉することもなく、画面の中に溶け込んでいます。

この頃、山下は福沢絵画研究所でダリやエルンストに夢中になったり、研究所の先輩から借りた19世紀フランスの詩人、ロートレアモンの詩集『マルドロールの歌』を読み込み、それをノートに書き写した日々などを思い浮かべながら過ごしていたといいます。同作は、いかなる人間も容易に残忍な殺人鬼となる様相を謳った長編詩で、山下がその作品世界に自身の従軍体験を織り込んだペン画の連作、〈マルドロールの歌〉が生まれる重要なインスピレーションとなりました。

ナイフを手にする人物、棺に入った人骨、翼の生えた生き物が頭部を喰らう様子などは、モノクロの静謐な画面と相まって、観る者に死のイメージを強く喚起します。一連の作品は、娼婦や兵士をモンタージュした構想をさらに発展させたもので、山下が戦場での過酷な体験を告白した初期の重要なシリーズに位置づけられます。42年、除隊した山下は福沢の許可を得て、49年まで研究所のアトリエを間借りしながら制作を続けました。

伊原宇三郎と戦争 （展示室1 パネル 6/7）

1938 年、伊原は軍の用命を受け、従軍画家として初めて外地に赴きました。〈汾河を護る（夜は不眠の警備）〉は、中国の山西省で夜間の敵襲に備え昼寝する警備兵に取材した作品です。彼はこの時の体験を振り返り「題材が画家に指定されるのでない限り、斯うした現地報告式の程度のものが精々であつて、これ以上に出ることに嘘を感じる。（中略）真実血の^{にじ}しみ出る様な、肉の躍り上る様な戦争画といふものは本当に召集されて行つて、本当の戦争の体験を持つ画家の手からでなくては生れないのではなからうかと思ふ。」（註 1）と記しています。

その後も、伊原は兵士として直接戦闘に加わることなく、戦場で一斉に突撃する兵士たちをとらえた躍動感を感じさせる作品を描く一方、戦争に翻弄された市井の人々を題材にした作品も残しました。

〈陰〉は、1946 年に開かれた第 2 回日本美術展の出品作で、画面手前に柱にもたれかかる少年、奥に胸を露わに俯く女性が描かれます。戦後の混乱した世相と二人の身の上を暗示するような作品です。その習作と見られる複数のスケッチと本作を見比べると、少年の足の組み方や女性の人数、配置など入念に構想を練っていたことが分かります。

伊原は戦争責任を問う美術界の声に対し、「当然の協力、奉仕と考えていた。戦争に勝ちたかつたからである」（註 2）と語っています。これ以後、美術界の要職を歴任した伊原は戦争画について積極的に言及することはありませんでしたが、彼の発言は、戦時下の美術家たちが置かれた複雑な立場を表明、代弁するものであったでしょう。

（註 1）伊原宇三郎「汾河を護る」『みづゑ』1938 年 12 月、574 頁。

（註 2）伊原宇三郎「戦争美術など」『美術』1945 年 12 月。

サルバドール・ダリの版画集〈マルドロールの歌〉 （展示室1 パネル 7/7）

この作品は、ダリがシュルレアリストたちの間で広く読まれた 19 世紀フランスの詩人、ロートレアモンの詩集『マルドロールの歌』に寄せた版画集です。いくつかのヴァリエーションがあり、大別すると 1934 年刊行のものと、1974 年刊行のものに分かれます。当館の所蔵作品は 1974 年版で、写真を銅版に転写して腐食させるエリオグラヴェールの技法が用いられています。

全 51 図の内、そのほとんどが『マルドロールの歌』の詩句とは直接関係のない画面で構成されていますが、少数の例外があります。第 21 図には、本編「第六」の主人公であるイギリスの少年、メルヴァンが登場する場面の有名な詩句、「彼は十七歳と四ヶ月だ！（中略）そしてなによりも、ミシンと洋傘との手術台のうえの不意の出逢いのように美しい！」（第六の歌より 栗田勇 訳）に即して描かれています。 観る者をたじろがせるような独特のグロテスク且つデフォルメされた形態は、ダリの作風上の特徴をよく示しています。

この他、ジャン＝フランソワ・ミレーの〈晩鐘〉に着想を得た作品もあります（第 18、20、26、27 図）。貧しくも慎ましく生きる農民たちが、一日の労働の終わりに祈りを捧げる様子をとらえた作品として広く知られますが、そうした敬虔な姿にエロス、あるいはユーモアを忍ばせたような画面です。奇妙でありながらウィットも感じさせる、ダリならではの作品世界を御覧ください。

珠玉の海外美術 (展示室 2 パネル 1/1 ※展示期間：10/15 ～ 11/30)

当館は 2025 年 3 月末現在、海外作家の作品資料を約 1800 点所蔵しています。その中から、20 世紀美術の主要な動向に沿って活躍した作家たちの名品を紹介します。

パブロ・ピカソは、描く対象を多視点から捉え直すキュビズムの手法を用いた先駆者です。今回は彼の恋人で、シュルレアリストでもあったドラ・マールの肖像画や、マン・レイが撮影した肖像写真など関連作品も合わせて展示します。

この他、1950 年代以降、大量生産・消費社会の到来を背景に、雑誌や広告など身近な素材をモチーフにした制作で注目を浴びたポップ・アートの作家、アンディ・ウォーホルやデイヴィッド・ホックニーの作品や、幼少期にホロコーストを経験し、その痛みをペンディングナイフで刻印したユダヤ人の作家、ローズマリー・コーツィーの大作など、当館が所蔵する珠玉の名品をお楽しみください。

Masterpieces of overseas

The Tokushima Modern Art Museum has about 1800 works of the overseas artists as of the end of March, 2025.

We introduce the masterpieces by the artists who played an active part along main tendencies in the art of the 20th century.

Pablo Picasso is a pioneer of Cubism catching and drawing an object from a multi-viewpoint. This term, we exhibit Picasso's portrait of Dora Maar, a surrealist and his lover, and her photographic portrait by Man Ray, and other related works.

In addition, we display the works by pop artists such as Andy Warhol and David Hockney. They attracted attention by their activities using magazines and advertisements as motifs against a backdrop of the arrival of mass production, and mass consumption society after 1950s.

You can also see a work of a Jewish artist, Rosemarie Kocky. She carved her pain, caused by her childhood experiences of the Holocaust, into her works with the pending knife.

Please enjoy this exhibition.